

栽培資源の価値

稚魚を放流して水産資源を増殖する栽培漁業は、マダイ、アワビ、クルマエビなどの高級な魚介類を対象として、全国各地で行われてきました。栽培漁業の最終目標は、造成した資源から得た利益により自立的に放流を継続して資源を維持していくことですが、そこに達するまでには様々な課題があります。

伊豆分場では、マダイの栽培漁業の実現に向けた研究を続けています。静岡県沿岸には、これまで30年以上にわたってマダイ種苗の放流が行なわれており、累積放流尾数は3千万尾に上っています。継続した放流により、昭和50年代には50トン以下に減少した漁獲量は、近年には100トン程度に回復しており、遊漁船の採捕量と合わせると年間300トン以上が漁獲されていると考えられています。また、千葉県から三重県沿岸のマダイ資源は、高水準で安定しているとも評価されています。静岡県周辺海域のマダイ資源は、種苗放流によって資源回復に成功したと言えるでしょう。

しかし、マダイから得た利益で自立的に放流を継続するには至っていません。回復した資源から得られる利益が十分ではないからです。かつてマダイは1キログラムあたり3,000円以上的高级魚で、多くの漁業者が利用していました。しかし現在は1,000円を下回っており、マダイを主な対象にして漁業を営む人はほとんどいません。マダイは資源の回復には成功しましたが、漁業の対象としての価値が低下してしまったのです。魚価の低迷はマダイに限ったことではありませんが、安定生産される養殖マダイの影響や経済の状況など、価格低下の原因は簡単にはわかりません。しかし、供給量が増えれば価格が下がるのは経済の法則です。天然マダイというだけでは売れない時代になったのです。

栽培漁業の目標に向けて重要なものは経済性です。低いコストから大きな利益を得るための研究は今後も続けなければいけません。これに加えて、栽培対象種も、価値を上げる取り組みが必要ではないでしょうか。最近では6次産業化など、付加価値向上の取り組みが広く行われています。かつての高級魚が新しい魅力を得て輝きを取り戻せば、受益者負担による栽培漁業の完成に近づけると思います。

(高木康次)